

現代用語の基礎知識

Encyclopedia of Contemporary words

自由国民社

2006

コレだけで実に便利な!
plus more 切って使える
折りたたみ手帳

2005をまとめ、
2006を讀みとく
新語と専門語、
基礎用語とトリアの事典
全2003ジャンル
35000語解説



『現代用語の基礎知識』選

2005 ユーキャン新語・流行語大賞

表彰記念 平成17年12月1日



監修：土屋和恵 山形大学名誉教授

あなたとニッポンの立ち位置がわかる 特集

…… 国や個人を分類する新基準・新指標

【 ニッポンは世界の中のどこに立っているのか。
あなたは、ニッポンの、そして世界のどこに立っているのか。 】

① 世界で最も暮らしやすい国は？…世界と日本の暮らしやすさ指標

エコノミスト誌が Life-satisfaction surveys (暮らし満足度調査)として2005年より算出。111カ国を調査した。1位にはアイルランド(GDPでは4位)。家族や地域とのつながりなどが高く評価された。トップ10内には豊かさを表す指標やランク付けでは常連である北欧勢が、3位にノルウェー(GDP:3位)、4位にスウェーデン(GDP:1位)、7位にアイスランド(GDP:8位)、9位にデンマーク(GDP:10位)で登場。日本は17位(ただし、1人当たりのGDPのランクでは3万750ドルで16位)。

世界と日本の暮らしやすさ指標…トップ20

1 アイルランド 8.333

3 ノルウェー 8.051

7 アイスランド 7.911

12 フィンランド 7.618

4 スウェーデン 8.015

9 デンマーク 7.796

16 オランダ 7.433

5 ルクセンブルク 7.937

20 オーストリア 7.268

8 イタリア 7.81

2 スイス 8.068

10 スペイン 7.727

19 ポルトガル 7.307

17 日本 7.392

18 香港 7.347

11 シンガポール 7.719

6 オーストラリア 7.925

15 ニュージーランド 7.436

14 カナダ 7.599

13 アメリカ 7.615

暮らしやすさ指標は以下の9つの要素とデータから算出。

- (1) 「物質的な幸福度(物質的に満足な暮らし)(Material well-being)」: エコノミスト誌Intelligence Unitによる1人当たりのGDP、購買力平価によるドル換算
- (2) 「健康(Health)」: US統計局の平均寿命
- (3) 「政治的な安定と保障(Political stability and security)」: エコノミスト誌Intelligence Unitの独自の調査
- (4) 「家庭生活(Family life)」: 離婚率(国連とEuromonitorデータによる)
- (5) 「地域生活(Community life)」: 教会への参加あるいは地域活動への

- 参加など(ILOやWorld Value Surveyデータによる)
 - (6) 「天候・地理(Climata and geography)」: CIA World Factbookデータによる
 - (7) 「職業安定度(Job security)」: エコノミスト誌Intelligence UnitとILOの失業率
 - (8) 「政治的な自由度(Political freedom)」: Freedom Houseデータによる
 - (9) 「男女の性差(ジェンダー)均等度(Gender equality)」: 男女の平均収入比率(UNDP「Human Development Report」による)
- (「The Economist Intelligence Unit's quality-of-life index」 The Economist, 2005)

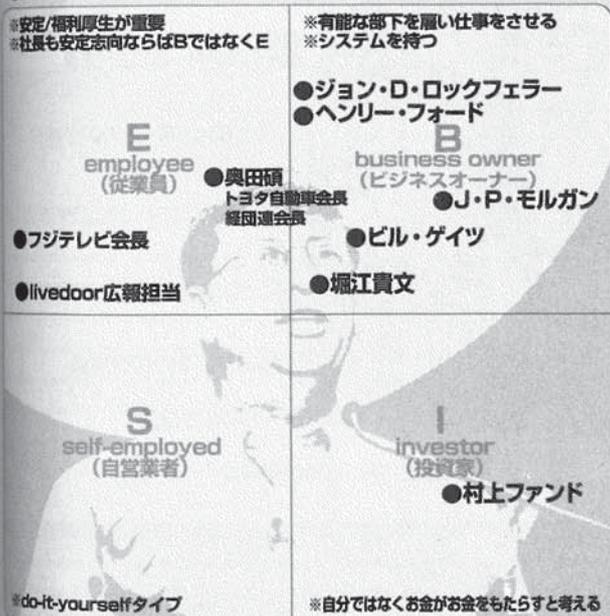
数値上は、表面的に回復してきたかに見える日本経済でも、その実は骨粗鬆症が進行している。日本は昔から「資源のない国」と言われてきたが、空念仏のようにただ繰り返しているうちに、人々はその本来の意味合いを忘れてしまったようである。日本は昔から、資源も耕作地もないのに人口だけは多い、人口過多の国である。この多すぎる「人的資源」を安価で良質な労働力として活用できたことが、戦後の日本の驚異的な経済成長の要因の一つだった。しかし、経済一流・政治三流と言われたいびつな政治・経済構造は、良質な労働力に対して安すぎる賃金しか提供できなかったために、逆に仕事の割に実入りのいい「おトクな職業」への人材シフトを進める結果となった。そうして、日本の経済力を支えてきた製造業の現場では、高い技術を持った熟練工は高齢化が進み、新入りは受験競争の敗者ばかりとなり、労働力の質的低下が深刻化するに至った。これは、熟練工の価値を理解しない経営者が、機械化、世代交代、失業といったプレッシャーを利用して、無軌道に熟練工の賃金を削りまくった挙げ句の自家中毒である。

こうした流れは、元々あったものだが、それに拍車をかけたのが、バブル崩壊以降の長期不況だった。この頃から、経営環境の悪化や規制緩和の進展など、いくつかの要因によってリストラの動きが激化し、コスト・カットがもてはやされるようになった。しかし下手なコスト・カットは、下手なダイエットと同様に、企業の体力を深く蝕むことになる。リストラ圧力を利用して、正当な報酬を値切ることによって、労働意欲の低下や新規採用者の質の低下を招くため、本質的な企業体力にはマイナスとなるからである。短期的なコスト・カット・マジックで持ち上げられる諸指標は上向いているが、もともと粉飾決算であるから「株式会社ニッポン」は、そんなうわべの数字とは裏腹に、本質的な経済力の低下には一段と拍車がかかり、失政のツケはその責任者が払うことなく、一般国民にツケ廻されるであろう。重税、ハイパー・インフレ、預金封鎖、どこかの省庁が終戦直後の預金封鎖の根拠法が時限立法ではなく、現在直ちに実施できる法であること、を確認して喜んでいられること、一般国民の生活はいつそう低下すると読めるのである。

11 あなたは経済人としてどこに属しますか？

『金持ち父さん 貧乏父さん』で著名なロバート・キヨサキの理論による指標。お金(収入)の流れ「キャッシュフロー」によって人の生き方は4つ(クワドラント)に分類される。Eは従業員(employee)、Sは自営業者(self-employed)、Bはビジネスオーナー(business owner)、Iは投資家(investor)。BかIに移動して、金も時間も豊かな「経済的自由」を得るには、現在、自分がどの生き方に属しているか知り、いかにしてBかIに移動するか考えることであると唱える。

キャッシュフロー・クワドラントという新指標

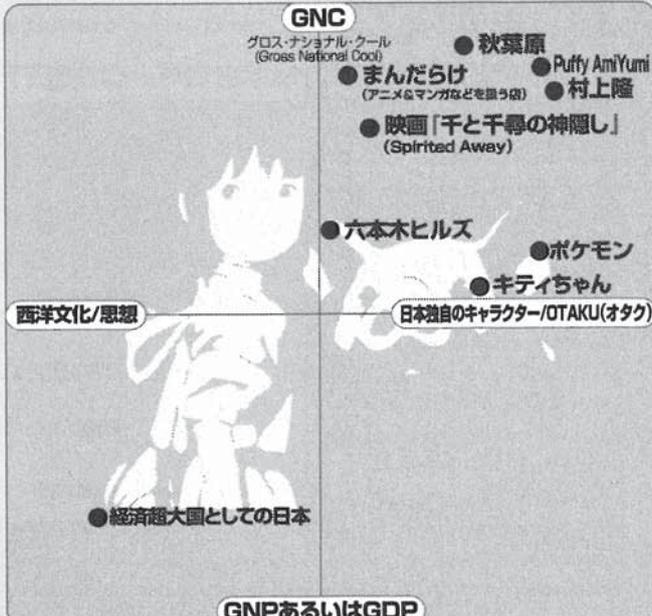


CASH-FLOW™ 筑摩書房刊・ロバート・キヨサキ+シャロン・レクター
[金持ち父さんのキャッシュフロー・クワドラント]を参考に作成

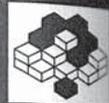
12 サブ・カル超大国ニッポンを知っていますか？

2002年5月、ダグラス・マ格雷イがアメリカ「フォーリン・ポリシー」誌に発表。かつての経済大国日本は、今や文化的超大国として、アニメ、マンガ、オタク力、キャラクター力を発揮。それはGDPやGNPに代わるGNC(グロス・ナショナル・クール)で、日本の新たな影響力だと述べた。03年にはタイム誌アジア版も「六本木ヒルズ」「キティちゃん」などをGNCとして紹介。フィギュアなどで知られる村上隆やアメリカで人気のPuffy AmiYumiもGNCとして分類できる。

グロス・ナショナル・クール=GNCという新指標



(Douglas McGray "Japan's Gross National Cool" Foreign Policyを参考に作成)



オタクの文化

ここに掲載している用語解説は、「はてなダイアリー」の利用者によって編集されたものです。
●おとな <http://www.hatena.ne.jp/>

◆大きなお友達

オタク（おたく）の隠語として使用される事が多い言葉。（…）
大人（*1）になって着ぐるみヒーローシヨーを見に行っている熱狂的なファン。仮面ライダーやセーラムーン、ポケモンなどの着ぐるみシヨーに魅了される。なかには一眼レフのカメラをもつ気合いの入ったファンもいる。そういう彼らのことを大きなお友達という。
イケメン俳優ブーム以前は彼らが最前列を占領することが多かったが、ヒーロー物で出演しているイケメン俳優がゲスト出演する場合は、主婦などが先に陣取り、最前列を占領する。

（*1）子供連れでないところにポイントがある。（笑）

◆たん

人名（主に女性）につける「ちゃん」を、声優やアニメキャラなどへの愛情を込めて訛化させたもの。幼児音的なニュアンスが加わる。萌えを加速させる作用をもつ。（…）おそらくはネット発祥の用語（*1）。匿名掲示板での「○○たんハアハア…」という言い回しから始まり、現在は「ハアハア」以外の目的でも広く用いられている。

流行とことば 社会風俗

この1年の事件の細部にやどる

若者のことば

さまざまなことば

テレビ番組批評

子どもの文化

日本語

現代の歴史

ファッション

美容

（*1）ただし、商業作品タイトルで「たん」が最初に使われたのはジョージ秋山の『コンピュータたん』（1970（昭和45）年）かもしれない。

◆萌え属性

オタク用語の一つ。萌えを感じさせるキャラクターの特徴やパーツ、シチュエーションなどのこと。くだけた言い方をすると「萌えツボ」のこと。属性のバリエーションに応じて「○○萌え属性」「○○属性」などよばれる（妹萌え属性、眼鏡属性など）。
1. 受け手側が弱点として抱えている、キャラクターの特徴に対する好み（用法は「フェチ」に近い）
2. 萌えキャラ側に備えられる、萌える特徴やパーツ

（…）「自分の新たな萌え属性を自覚した」（前者の用法）とか、「●●（キャラ名）にツンデレ属性がついた」（後者の用法）といった使われ方がしたりする。（…）

【関連語】妹属性 委員長 猫耳

◆ツンデレ

萌え属性の一種。元はギャルゲー用語だが、現在は萌え業界全般で広く用いられている。

ツンデレとは例えば、普段はツンツン、2人っきりの時は急にしおらしくなってデレデレといちゃついてくる。ようなタイプのヒロイン、あるいは、そのさまを指した言葉である。

別の具体例をあげれば、ストーリー開始時は主人公に対してとげとげしい態度（ツンツン）を取っていたヒロインが、何かのきっかけでツンツンの中にも隠し切れない

照れを見せる、あるいは反転して急速に好感度を上昇させていく（ツンデレ）などのパターンがありうる。

古典的なラブコメはこのパターンが少なくなく、現在でも広義に捉えればツンデレ的恋愛要素を利用する作品は数多い。ベタと王道とも受け取れる手法である。（…）ツンデレを愛する者の中には、自身を「ツンデレラー」と称するグループもある。

また、そうした者の中には「ツンデレ系」の言葉を用いた直後に自身の人生を指して自虐的に「詰んでる系」とよぶこともある。（…）

◆萌え擬人化

オタク文化の一つで、あらゆる「物」を萌えの対象にしてしまう手段の一つとして、「物」を女の子に擬人化する手段がある。多くの場合、擬人化した「物」の名称に「たん（♀別項）」をつけてよび名とします。（…）例としてあげると、（…）

- ・ 2Kたん (Windows2000の擬人化。)
- ・ Meたん (WindowsMeの擬人化。)
- （…）
- ・ キルヒホッフたん／キルヒたん (電磁気学のキルヒホッフの法則の擬人化)
- ・ 日本国憲法たん／刑法たん（…）
- ・ 1円たん／5円たん／10円たん（…）

◆無表情キャラ

マンガ等で感情表現が記号的に表されるのを逆手に取った表情の乏しい、またはないキャラクターのこと。無表情なのは感情がない、感情を表に出すことが苦手、冷静等、パターンがある。感情がないパターンは口ポットや人造人間に多く、感情を表に出す

ことが苦手なキャラは恥ずかしがりや不器用なキャラに多い、冷静なのはお姉さまキャラ、として登場が多い。

『新世紀エヴァンゲリオン』の綾波レイでフィチャーされるが、『ドラゴンボールZ』の人造人間17・18号なども有名。ヒロインの場合主人公と出会うことで表情が豊かになることが多い。（…）

◆ラッキースケベ

（…）（極めて）（非常に）幸運な状態を指す。【関連語】シン・アスカ

◆○○○○○○

一般には「美少女戦士セーラムーン」を指す隠語。あまり意味のない伏せ字の使い方である。このように表記しておく、追及を受けた場合に「モーターポート」の話題であると言ひ逃れが可能である。受け止め方は人それぞれであり、UNIX系の人間であれば「スーパーユーザ」のことだと考えることである。夏場なら「オーバート」、冬季には「オーバークート」と季節に応じた使い分けも可能。（…）

◆カトキ立ち

メカデザイナー・カトキハジメがデザインした口ポットの設定画で使用される立ちポーズのこと。肘を軽く曲げて両拳を握り、胸を張り、肩幅に広げた両足で地面を踏みしめるのが特徴。

一枚絵でデザインの細部を伝えられる資料向きのポーズでもあるのだが、このポーズを取らせた口ポットはどんなへおいデザインでもカッコよく見えてしまうことが後に判明する。（…）

◆脱オタ

◆「あなたの息を、福山雅治に」 明治のキシリトール入りガム、キシリッシュのCM。職場で会う、いい人なんだけと生理的に苦手なあの人が、目を閉じてみるとなぜか息だけは福山雅治のように感じる。実は彼は吐息をさわやかにしてく

猪瀬直樹
作家

現代の歴史



用語の解説

【いのせ・なおき】
1946年長野県生まれ。87年『ミカドの肖像』で大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。96年の『日本の研究』は小泉構造改革のきっかけをつくった。東京大学客員教授。

この用語解説は、「現代用語の基礎知識」58年分のバックナンバーから、現代を考えるうえで重要な解説を抜き出して再録し、著者がコメントをつけるスタイルをとっています。



2005年に 関連する歴史

◆三公社五現業

「三公社とは国鉄、電々、専売の三つの公共企業体で、五現業とは国が経営する企業で、①郵便、郵便貯金、郵便為替、郵便振替貯金、簡易生命保険および郵便年金の事業（郵政省）、②国有林野事業（農林省）、③日本銀行券、紙幣、国債、

印紙、郵便切手、郵便葉書等の印刷事業（大蔵省）、④造幣事業（大蔵省）、⑤アルコール専売事業（通産省）の五つをいう。しかしよく三公社五現業といわれるのはこれらの労働組合のことである。（略）組合は九つあって（国鉄が国鉄労働組と機関車労働組に分れているため）公労協結成をしている」（1957年版）
この時代は「普陸軍、今総評」と



いわれ労働組合が時代の寵児であり、公労協は総評の中核部隊だった。過去の総評を知らない人も、現在の連合なら知っている。左翼的な総評は社会党の凋落とともにしだいに力を失い、旧民主党系の労働組合と一緒に、連合を結成。連合は民主党の支持基盤の一つである。おわかりだろう、だから郵政民営化に民主党は反対。その結果、小泉自民党に惨敗する。このごろの日本の首相は1年か2年で交替する習慣だ。その例外が小泉純一郎首相で、長期政権として在任期間を競っているのは、1980年代に首相を5年間も務めた中曽根康弘である。中曽根内閣の大きな成果は、国鉄をJRに、電電公社をNTTに、専売公社をJT（日本たばこ）に民営化したことだ。残っている大物は郵貯・簡保・郵便事業の郵政3事業の民営化だった。なお道路公団は当時も存在したが、1956（昭和31）年にできたばかりで誰も知らない。だいたい当時は自動車が少ない。渋滞という言葉がない。名神高速も東名高速も首都高速も完成するのは60年代のことだ。

◆万国博覧会

「一九七〇年万国博は日本（大阪府千里丘陵）で開催されたが、これはアジアで最初のもので、そのテーマは「人間の進歩と調和」と

なっている。なお、EXPO'70はJapan World Exposition Osaka 1970の略。参加七カ国に達し、入場者延べ六〇〇万人を越えた」（1971年版）
愛知万博の入場者数は2200万人。それでも行列だらけで半日も待ち時間という日があった。600万人というのと、2人に1人が入場した勘定になる。テレビの視聴率が20%ぐらいなら人気番組ではよく突破するが、さすがに50%は紅白歌合戦とかサッカーのワールドカップぐらいしかない。それも視聴率のこと。混雑の中を實際に足を運ぶのだから当時の熱狂ぶりのすごさが理解できるだろう。



◆官僚主義

「國家權力を擔（担）うものとして、上級の者には盲従し、下級の者或は民間の者には不必要に權威をふりまく役人の態度。このような官僚が中心になって政策を決定して行かう政治を官僚政治という。官僚が政治力の中心になる政治形

流行とことば 社会風俗

この1年の事件の細部にやどる

若者のことば

さまざまなことば

テレビ番組批評

子どもの文化

日本語

現代の歴史

ファッション

美容

態は絶対主義時代において顯著である」(1950年版)



学者はたいがい左翼系で、しかも権力の実態には疎かった。政治の動きを細かに報じていたのは記者クラブに加盟している新聞社だった。だが彼らは行政情報を運んでくれるだけで、距離が近すぎて官僚機構を概念的に把握しようとする意識は育たなかった。代わりに学者が「絶対主義」などと訳のわからない概念を持ち込んだ。通用するわけがない。いまも永田町の国会を支配しているのは霞が関である。だが官僚機構は霞が関だけでなく、特殊法人を虎ノ門に配置し自己増殖させた。相変わらず学者がその実態調査をしないから、代わりに僕がやった。拙著『日本国の研究』参照。

◆不確実性の時代

「アメリカの経済学者ガルブレイス氏が著した『不確実性の時代』(The Age of Uncertainty)が日本でベストセラーとなり、この言葉が盛んに使われた」(1979年版)



タイトルがうまかった。第1次オイルショックが1973(昭和48)年、再び79年に第2次オイルショックで不安感が増大した。ガソリンが1リットル160円ぐらいになり、僕も焦った。だがすぐ元に戻

した。だから今回のガソリン高騰もそれほど気にする必要はない。

◆団塊の世代

「終戦の結果昭和二二、三年か四年ぐらゐまでの第一次ベビーブーム時代に生まれた人たち。人口約一〇〇〇万人、前後の世代を二〇〇万人上回る。ヘビが卵をのんだようにふくれている。テレビっ子世代、マンガ世代、ビートルズ世代、戦無派世代、全共闘世代、ニューファミリー世代、新中年、スニーカーミドルと成長する。堺屋太一が団塊の世代と名づけた。目立つ世代だ」(1986年版)



僕もその世代の一員になる。小学校では生まれ順に名簿が作られていたが、1946(昭和21)年の年末に近い生まれの僕は真ん中ぐらいだった。47年の早生まれがいかに多かったかということである。ちなみにビートルだけしは47年生まれだが早生まれなので、僕と同年生ということになる。1学年下の4月以降の47年生まれがピーク。48年生まれ、49年生まれは少しずつ減る。この世代が定年後、どこへいくのか、何をするのかでまた一波乱が起きる。

◆年功序列賃金

「わが国の大企業の中核の常用労働者の賃金は、まず学歴別に親がかり単身者の初任給に始まり、その企

業での勤続年数、したがって年齢が増すにつれて、増加していくしくみになっている。そのように勤続年数の長短が賃金決定要因として大きく作用している賃金体系を年功序列型賃金、略して年功型賃金という。(略)労働組合もまた、これがわが国の低賃金構造をささえている制度であるとして、最低賃金制、産業別最低賃金、同一労働同一賃金の線で、その変革にすすんでいる」(1960年版)



年功序列賃金体系が完成するのは高度経済成長を達成した1970年代である。かつて労働組合は年功序列賃金は「低賃金構造をささえている制度」と主張したが、低賃金であったのは1960(昭和35)年だからであり、その後、高度経済成長で賃金も物価も上昇した。バブル経済崩壊後、年功序列賃金体系による高い固定費(高額な人件費)、人材の非流動性は企業再生の壁となった。90年代の「失われた10年」には「リストラ」という言葉が流行する。

◆人手過多時代

「通産大臣の諮問機関である産業構造審議会が『昭和五十年産業構造の長期ビジョン』を昭和五十年七月に提出したが、そのなかでこれからの日本経済は、人手不足時代から、人手過多時代へと一

転する可能性を警告して話題になった。低成長時代へ移行すれば雇用増加率が落ちるのは当然だが(略)」(1976年版)



第1次オイルショックで一時的に成長が止まり、安定成長時代に入った。とはいえ日本経済は右肩上がり、実際は心配無用だった。

◆シラケ世代

「現代の若者を評して『シラケ世代』ということがある。やけっぱちのようできて変にさめている、世の中なんてどうせこんなもの、あがいたとてどうにもなりはしないと冷やかに眺めている、したがってその行動は他人から見るとだらけて見える。こういう若者が現代には多いということでの言葉が生れた。ただし大人が名づけたのではなく若者たちが『シラケるよ』などと使い始めたからである。昔なら『阿呆らしいよ』と表現したような気乗りしない時にも使う」(1976年版)



いまとあまり変わらない、と思われる若者が現れたのは高度経済成長が達成され豊かになったからである。だがこの世代は、会社に入ってそれなりに働いた。フリーター400万人、ニート70万人の今日とは違う。社会の傷は浅かつた。

2005（平成17）年のベスト・ブックに挙げる人も少なくない佐藤優『国家の罨』のキーワード。同書によれば、ロシア通で鈴木宗男議員と親しい外交官の佐藤は、対ロシア交渉に絡む公金支出、入札をめぐる身に覚えのない疑惑で検察に逮捕される。取調べを始めるに際して検事は「**国策捜査**」という言葉を使う。佐藤によれば「**国策逮捕**」とは、「国家がいわば〈自己保存の本能〉に基づいて、検察を道具にして政治的事件を作り出してゆくことだ。冤罪事件と違って、初めから特定の人物を断罪することを想定した上で捜査が始まる」というものだ。佐藤や鈴木宗男の場合は、小泉内閣が公平配分内政から新自由主義へ、国際協調路線から排外的ナショナリズムへ国策を転換する際、「時代のけじめ」的事件を必要としたというのだ。

国策捜査は、普通なら検察も相手にしない微罪を、ハードルをあえて下げ、引っかける。政治家や官僚の逮捕が世に与える衝撃が目的ゆえ、判決自体は執行猶予つきでよい。むしろスムーズな再出発ができるよう配慮される。中村喜四郎、山本譲司、中尾栄一、村上正邦らが、国策捜査の例として挙げられている。

「党内反対派非公認」という荒技で総選挙に圧勝した小泉首相は今後、「国策捜査」という荒技をも繰り出すのだろうか。その時には、逮捕前後からの検事との応酬すべてが詳細に書き込まれた『国家の罨』を精読した被疑者を、検察は相手としなければならないだろう。

◆昭和ブーム

1990年代から始まり、21世紀により浸透しつつある「懐かし」ブーム。「昭和」と称しても、昭和30年代（1955～64年）、あるいは1970年代あたりが主な対象とされる。新横浜ラーメン博物館などのテーマパークやプロジェクトXのヒット、「三丁目の夕日」映画化などは前者。山口百恵などのポップスや「白い巨塔」をはじめとするドラマのリメイクは後者。

昭和ブームの背景は、長期不況の閉塞状況だといわれる。右肩上がりで、世の中がこれから豊かになってゆく希望がもてた時代が、いまでは懐かしく感じられるというわけだ。ただ、「三丁目の夕日」やテーマパークを見るかぎり、みんなが未来目指してがむしゃらに働いた頃への郷愁は感じられない。むしろ、低い木造家屋の景観とか活気ある商店街など、高度経済成長（⇒別項）で失われたものが「懐かし」というかたちで再発見されているのかもしれない。

また、昭和40・50年代のポップスやドラマのリメイク・ブームは、新しいネタが尽きた音楽産業やテレビ局の苦肉の策と批判もされるが、大衆文化が洗練や多様化、細分化を経て万人の楽しめるものでなくなったいま、従来のように、さらなる創造を試みたり、欧米の最先端を直輸入するのではなく、原点を確認しようとする動きとも考えられる。「冬のソナタ」以来の韓流ブームも、国内では枯渇した「昭和」資源をまだ残す他国から再輸入する試みだったのかもしれない。

◆そのつど支持

2005（平成17）年9月の衆議院総選挙前夜、政治学者・松本正生教授（埼玉大学）が名づけた近年の有権者の傾向。社会的関係性や人への帰属意識が薄く、時々の

状況に応じて各党・各候補者を見比べ、投票の2、3日前、あるいは当日の投票所で支持政党や候補者を決める。従来の無党派層とも重なるが、投票の時点では支持政党なしとは限らないところから区別して「そのつど支持」とされる。東京都では、6割がこれに属するともいわれ、事前の世論調査による選挙結果予想が難しくなっている。そのつど支持の「大切な選択基準」は、「政治リーダーのキャラクターやパフォーマンス」であると松本教授は指摘する。小泉自民党の圧勝を支えたポピュリズムが、政策への安定的支持という本来のポピュリズムではないことは、ここからも明らかかなようだ。

◆社民

社会民主主義の略。社会民主主義者、社会民主主義政党をこう略す例もある。

社会民主主義は、社会主義の一派として経済的平等を政策の根本とするが、マルクス主義の正統派が主張した「プロレタリア独裁」（共産党の一党支配）を否定し、政党結成の自由と政権交代を認める議会制民主主義を前提とする点に特徴がある。

「社民」「シャミン」と略す場合には、侮蔑的ニュアンスが混じる時がある。本来のマルクス主義を標榜する急進派からは、穏健な社会民主主義は、暴力革命や共産主義の挙実現を避け、現行制度や権力と妥協するヘタレな一派と見なされるからである。ことに「右翼社民」という表現にはこのニュアンスが濃い。戦後、ヨーロッパではイギリス労働党、ドイツ社会民主党、フランス社会党、スウェーデン社会福祉労働党などの社会民主主義政党が政権政党として地歩を固め、福祉国家実現に寄与したが、昨今では「大きな政府」ゆえのその弊害も認識され岐路に立たされている。

◆三島の

戦後日本を代表する作家三島由紀夫は、思想的にもシンボリックな存在である。

私設軍隊「楯の会」を率いて市ヶ谷駐屯地へ乱入、自衛隊ヘクターを呼びかけ、割腹して果てた最後は、いまなお右翼勢力の多くが崇拝する神話だ。イメージ的形容として「三島の」といわれる場合、そのニュアンスは著しくロマンティックで耽美的な情念右翼のそれである。

その基本的価値観は、まず薄っぺらな戦後民主主義や経済成長への嫌悪と、民族的生命の源とされる「文化」への希求である。具体的には、葉隠的「武」、陽明学的「行動」、聖性を帯びた「天皇」、ギリシャ的な健康的肉体美、旧華族的優美や高雅、2・26事件の将校や特攻隊らにみる殉死の精神などが、あの絢爛たる文体に彩られたといえ、三島のイメージといえようか。その源には、三島の文学的出発点である保田與重郎らの日本浪漫派の美学がある。

◆保守／保守反動

近代において「保守」という立場は、後追いのかたちで現れた。すなわち、まず「革命」があって、その革命から何かを「保守」すべしという対抗的思想が次に登場する。

「革命」は、自由・平等・人権などの推進を図るが、

catalogue & dialogue

「論壇の今」用語の解説

浅羽通明 + α

評論家、みえない

大学本舗主宰



【あさば・みちあき】

1959年横須賀市生まれ。早大卒。早稲田大学・法政大学非常勤講師。著書に『アナーキズム』『ナショナリズム』（ともにちくま書房）、『教養としてのロースクール小論文』（早稲田経営学院）など。

◆格差

いちおうの豊かさと平和をまだ享受するも、いまいち明日が見えない日本人がおびえる新種の妖怪。他の呼称に「不平等」がある。

日本では、高度経済成長（⇒別項）により1960年代以後20年間で格差は縮小、経済的にも意識的にも、階級や階層が消えた「総中流社会」が実現したとされる。しかし、昨今の「格差」「不平等」論は、80年代以降、再び格差が拡大し、日本はもはやアメリカ以下ヨーロッパ以上の不平等社会と化しつつあると警告する。これらの統計分析がどこまで正しいかは批判もあるが、日本人好みの横並び感が崩れるのではという不安をかきたてるために注目を集め、格差拡大の実体に先行して、格差意識が高まる効果まで現れた。その背後には、リストラ、ペイオフに次ぐ小泉改革によって、社会が勝ち組と負け組に二極化する危惧や、ゆとり教育のもと、学歴エリートが家族を通して再生産される2世社会の実感がある。

「格差」論を総合し、所得格差は職業選択自由の格差を生み、ひいては希望の格差をもたらすとする山田昌弘『希望格差社会』はベストセラーとなった。しかし、格差拡大を前提に年収300万円の負け組的生き方も気楽と誘う経済アナリスト森永卓郎の主張も人気がある。真に問われるべきは、「格差は本当に悪か？横並び平等社会は無条件で善か？」かもしれない。

◆歴史認識

韓国、中国など、日本の植民地支配・侵略を被った国の政府等から、日本の「歴史認識」が問題視され、時には扶桑社版『新しい歴史教科書』の修正が要請され、また外交交渉に際し是正や謝罪が求められる事態は、いまや恒例となった。そのつど多くの日本人は、態度のとりように苦慮して右往左往する。2005（平成17）年6月10日、日韓歴史共同委員会から3年間かけた双方の学者による共同研究の最終報告書が出た。歴史認識の歩み寄りには成果がなく、韓国学者の論文は学問を超えた政治的主張が色濃く、日本側は反発したと朝日新聞すらが報じた。産経新聞はさらに「日本は実証的、韓国は結論ありき」と見出しをつけた。歴史認識の一致は難しいと。

どうやら、一致しないのは「歴史認識の内容」以前に、「歴史認識自体の認識」のようだ。韓国も中国も、歴史教科書は戦前の日本と同様、国定ただ一つ。すなわち歴史認識は、ただ一つの正しいものがあって、他説は誤りゆえ、修正謝罪して当然と考えられている。そして、正しい学説は、国家が公式な歴史（正史）として認め、国定教科書に載せる。

ところが、日本では「学問の自由」の建前から、歴史認識は学者の仕事であり、国家はかかわらない。学者ごとにその学問的立場や研究成果により、さまざまな歴史認識があって当然とされる。国内でさえ、歴史認識の一致は難しい。というより、一致しない多様な歴史認識からのカクテル光線あってこそ歴史的事実もより実証されてゆくと考えられる。

すなわち、「正邪」の規範として歴史を主張する韓国や中国と、まず「真偽」を近代科学的に実証しようと歴史に向かう日本とが対立している。歴史認識論議以前に、歴史哲学の共同討議が、実は必要なのである。

◆ブログ

ウェブログ（weblog）の略。インターネット上で簡単に作られて、自分の趣味関連の日記を公開してリアクションを期待したい人々には待望のホームページ（HP）形式。

日本では2002（平成14）年あたりから、2ちゃんねるに続く新しいネット上メディアとして増殖したブログを、05年に『ユリイカ』や『論座』が特集し、『アエラ』が記事とするなど、論壇周辺の注目が集まった。

その理由は、アメリカ、中国などの諸国でブログによる内部告発や情報提供、主張などが政治的表現として力を発揮、ブログ・ジャーナリズムといった期待がされたこと。また、HPや2ちゃんねるも同様だったが、世間ではごくマイナーで周囲に話題を共有する者も少ないが人一倍語りた論壇ファンに、自己主張でき、トラックバックやコメントを介してリアクションが受け取れるブログは、干天の慈雨だったこと。さらにプロの論壇人たちの一部がブログを始め、活字では得られなかったリアクションの手応えにはまり、ファンもそれを歓迎したことなどだ。

思えばネット以前にも、コミケ（⇒別項）、マニア雑誌や深夜放送の投稿、ミニコミ（プロの吉本隆明も『試行』で参入した）、文壇酒場など、こうした機能を果たした場合は時代ごとにあり、明治の文学雑誌も膨大な投稿層に支えられていた。欧米では社会を動かし、アジアでは地下で抵抗した言論が、日本では私小説的独白と馴れ合いを主とするあたりも毎度のことだ。

むしろブログに至り、参入もリアクションもきわめて敷居が低くなり、数百万人が一挙に自己表現の店を開けたのは異例だろう。だが、これを新しい民主主義ともち上げるのはどうか。開設されたブログの7割弱が3カ月を待たずして更新しなくなり、1年も続くのは2割弱だという事実（山本一郎『けなす技術』による）は、メディア環境を活かせるだけの豊富なネタと読者を引きつける資質を有する者が、いかに稀かを語っている。

◆国策逮捕

ローションビデオでは、サンリオの「キキ&ララ」やポケットモンスターの「ピカチュウ」などのキャラクターと共演。

◆ソフィア・コッポラ

1971年アメリカで、映画監督であるフランシス・フォード・コッポラの娘として生まれる。映画監督・ファッションデザイナー・写真家と多才な顔を持ち、アメリカの女の子たちの間だけでなく、日本でも憧れの女性として名高い。初監督作品『ヴァージン・スーサイズ』では、厳格な家庭に育つ美しい5人姉妹の自殺から、少女たちが大人へ成長していく途中に潜む、無垢ゆえの危険性を描いた。

◆サンリオ

1960(昭和35)年創業以来、「ハローキティ」「リトルツインスターズ(キキ&ララ)」「マイメロディ」「パティ&ジミー」などのキャラクターを生み出し、商品化する会社。「小さな贈り物が大きな友情を育てる」という信念のもと、グッズや出版物をつくり、テーマパーク「サンリオピューロランド」の運営を行う。サンリオの商品を販売する「ギフトゲート」は、小学生の女の子たちにとって可愛いもので溢れた、夢のような存在。それが次第に、一時期はキャラクターグッズ離れした大人の女性たちが、少女時代に抱いた憧れを思い返してサンリオグッズを集めたり、海外で「ハローキティ」の人気が高まり、ファッション界でもトレンドとして取り入れられるようになったことで、キャラクターは子どもだけのものではなくなった。サンリオが発行している『いちご新聞』には、「いちごの王さまからのメッセージ」という欄がある。いちごの王さまとは、社長の辻信太郎のこと。辻が雑貨づくりを始めた頃、いちごという存在をかわいいと思い、それからいちごはサンリオの象徴的なモチーフに。

◆『それいゆ』

イラストレーター・エッセイスト・ファッションデザイナー・人形作家など、多様な才能を発揮した中原淳一が編集人を務めた、1946(昭和21)年創刊の少女雑誌。「女性のくらしを新しく美しくする」という副題のとおり、終戦後、その日を生き抜くことにせいっぱいで、夢を忘れかけていた少女たちに、内面と外見の両方で女性として生まれた自分を美しく磨くことや、賢くものを考えることを提唱。

中原淳一はその他にも、『ひまわり』や『ジュニアそれいゆ』など女性のために雑誌の発行を行った。

◆プチグラ・パブリッシング

主に、写真集・絵本・海外キャラクターや映画のピクチャーブック、デザインやインテリアについての本など、書店で「芸術書」に分類される書籍の編集・発行を行う。ディック・ブルーナの絵本やヨーロッパの知育玩具、北欧のテキスタイルブランドなど、常にその時代の必要性に合った文化情報の特集を組む雑誌『Petit Glam(プチグラ)』も人気。

出版の他に、ロシアのキャラクター「チェブラーシカ」や、チェコの絵本の中のモグラのキャラクター「クルテク」などのグッズの制作・販売や、映画の配給・宣伝活動もする。

モデル兼写真家として活躍する東野翠れんを、写真家のホンマタカシが撮影した『アムール 翠れん』、奥田民生プロデュースで歌手デビューを果たしたアイドル加藤ローサの写真集『ローサのもと』、魚喃キリコの漫画をもとに、モデルで女優の市川実日子を写真家川内倫子が写した『blue 川内倫子写真集』など、少女と彼女たちの視線とがおさめられた写真集は、男性だけでなく、多くの女性たちから共感を得ている。

◆大島弓子

少女漫画家。短編～中編の作品が多い。萩尾望都、竹宮恵子、山岸涼子などとともに昭和の生まれ年から、「24年組」とよばれている。1968(昭和43)年「ポーラの涙」(『週刊マーガレット』)でデビュー以来、大人の女性一歩手前のちょっと浮き世離れた、天使のようにフワフワとした心をもつ少女たちの、思春期やリアリティーを描く。哲学的ともいえる独特な世界観が、漫画界だけでなく、吉本ばななをはじめとする女性作家やミュージシャンへ大きな影響を与えた。

子猫の視点から世界を見つめた「綿の国星」は、虫プロによってアニメ化。他にも、「毎日が夏休み」は佐伯日菜子、「金髪の草原」は池脇千鶴の主演で映画化。

◆ハンドメイド

手づくりのこと。生活を楽しみ豊かなものにするための手段。昔から、編みものや手芸、お料理の本や専門雑誌は存在していたが、それらはたいてい主婦のためのものであったり、一部の女性たちの専門的な教本であったりした。それがここ最近、既婚・未婚にかかわらず、また特別な技術をもたない20代～30代女性に向けた、楽しく簡単に行う手づくりを推奨する本や雑誌が増えている。手芸では、伊藤まさこ・前田まゆみ、料理では、長尾智子・福田里香、その他にも、Goma やしまおまほなどが人気。

『みづゑ』(美術出版社)『くりくり』(糖衣社)は、手づくりを専門に扱う雑誌。

◆大林宣彦／岩井俊二

日本映画界で、少女、または少女性をもった女性たちの憧れや恋心を描き続ける2人の映画監督。

大林宣彦は、「尾道三部作」と呼ばれるファンタジー映画、「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」が代表作。どの作品も、少女たちがもつときめきのなかに、どこかセンチメンタルな雰囲気漂う。

岩井俊二の作品では、クスリと笑えるシーンを含みながら、少女漫画をそのまま映像化したような「花とアリス」「Love Letter」「四月物語」「打ち上げ花火、下から見るか? 横から見るか?」が人気。

◆辛酸なめ子

「しんさんなめこ」と読むペンネームと、本名の池松江美両方の名前で、漫画家・エッセイスト・芸術家として活動。マニャック感溢れる実験的な視点と洞察力から、「女性版みうらじゅん」「裏ガーリー」とよばれることも。

世が定めた価値観や流行を自ら試し、その率直な体験談ゆえに毒舌と評されることもあるが、ガーリー文化の裏側、少女に潜む二面性、果ては人間の本質に触れ、女性ファンも多い。



【かい・みのり】
1976年静岡県生まれ。女性の憧れ、乙女などを主なテーマに、詩やエッセイを書く。女性を対象にした雑貨ブランド「Loule」のプロデューサーでもある。著書に「京都おでかけ帖」など。

◆オリーブ少女

男性誌『POPEYE』の増刊として、1982（昭和57）年に平凡出版（現マガジンハウス）から創刊された雑誌『Olive』を教科書にする女の子たちのこと。

子どもでも大人でもない「少女」の気持ちのまま、永遠に可愛いものを追究し、おしゃれや放課後を楽しむことに憧れを抱く。「リセエンヌ」と呼ばれるパリの女子学生がファッションやライフスタイルのお手本で、「同級生の女の子とはちょっと違う私」という強い自意識をもつ。文学・映画・音楽・雑貨と、趣味は王道よりもサブカルチャーに寄ったものを嗜好し、小沢健二のようなインテリ文科系男子が理想の男性像。スタイリストの岡尾美代子、モデルの市川実和子・実日子姉妹などは、オリーブ少女たちのカリスマ的存在。

『Olive』は、2003（平成15）年に事実上廃刊。1980年代～90年代に10代を過ごした元オリーブ少女たちは現在、同社『Ku:nel（クウネル）』や、『暮しの手帖』（暮しの手帖社）など、丁寧な生活を唱える雑誌に移行している。

◆チュニック

女性はみな、ズロースというちょうちんみたいな形の下着を身につけ、色は白でなければいけないという価値観が当たり前だった1950年代。カラフルな配色、肌が透ける薄い素材や、レースや刺繍で装飾された下着を次々と発表し、日本の女性たちに、下着で楽しむ見えないおしゃれ、見せるおしゃれがあることを気づかせてくれたブランド。「スキャンディー」という名前の、過激なパンティーが代表的な商品。現在でも、大阪に直営店がある。創業者でデザイナーの鴨居羊子は、下着ショーの開催、映画制作など斬新な発想を実現させ、女性に対して保守的だった社会に衝撃と影響を与えた。エッセイや絵画なども数多く残し、キチュな女の子文化をつくった。

◆森茉莉

1903（明治36）年、森鷗外の長女として生まれ、溺愛されて育つ。20代で2度の離婚を経験。初婚の際に渡欧し、パリでの生活を謳歌。旅先のロンドンで最愛の父の死を知らされる。

54歳の時、鷗外との思い出や憧れを綴った随筆集『父

の帽子』（講談社）で作家デビュー。無垢でありながら男性を魅了し破滅させる少女の、父親とのつながりを描いた『甘い蜜の部屋』（筑摩書房）、青年と美少年の耽美な同性愛小説『恋人たちの森』（新潮社）が代表作。

『マリアのうめぼれ鏡』（筑摩書房）は、「女というものにとって、うめぼれ鏡と、褒め手とは絶対に必要なものである」など、編集者が森茉莉のエッセイから輝く言葉を選びだした語録集。

◆銀色夏生

ギンイロナツヲと読む。作詞家としてデビューし、柏原芳恵、斉藤由貴、松田聖子、早見優、小泉今日子など、80年代女性アイドルの作品を多く手がける。時に「僕」など中性的な表現がみられるが、性別は女性。その後作詞から離れ、イラストを描いたり写真を撮りながら、詩人として数多くの詩集を出版。1980年代後半～90年代前半、女子中高生たちの間では、角川文庫の銀色夏生詩集が恋のバイブルだった。

◆minä perphonen

白金台に直営店とアトリエを構える洋服ブランド。1995（平成7）年に、皆川明によって設立。ブランド名のミナ・ペルフォネンは、フィンランド語。minäは一人称で、perphonenは蝶の意味。2003年まで「minä」という名で活動を行い、その後現在の名前に。「ホシハナ」「雪の日」「マーメイド」など生地のすべてに詩のタイトルのような名前がつけられ、繊細さと大胆さの両面を備えた絵や模様が、刺繍やプリントで表現されている。洋服の他にも、バック・ブローチ・靴・椅子など、発売してすぐ品切れとなる商品は多数。

◆嶽本野ばら

文筆家。京都府出身。エッセイストとして活躍する。男性ながらも昭和初期の女性作家のような文体と美意識の高い嗜好・精神から、「乙女のカリスマ」とよばれる。特に彼が一貫してモデルにしている、ゴシック・ロリータ・ファッション〔ゴスロリ（⇒別項）〕に身を包む多感な少女たちから支持を集める。

2000（平成12）年には『ミシン』（小学館）で小説家としてデビュー。同書に収録されている、切なさ、厭世感、孤独、喪失感、純愛に満ちた物語「世界の終わり」という名の雑貨店」は高橋マリ子、茨城県を舞台にロリータ少女とヤンキー少女の友情が描かれた『下妻物語 ヤンキーちゃんとロリータちゃん』（小学館）は深田恭子の主演で映画化された。

◆Tommy february⁶

「トミーフェブラリー」と読み、最後の「6」は発音しない。人気ロックバンドである the brilliant green（ザ・ブリリアントグリーン）のボーカル・川瀬智子のソロプロジェクトの名称で、その名の由来は彼女の誕生日が2月6日だから。眼鏡をかけ、制服やチアリーダーのユニフォームを着て、アメリカのハイスクール女子学生のイメージで踊りながら歌う。小道具として、星のステッキを持っていることも。ちょっと神経質で夢見がちな乙女というキャラクター設定もある。音楽性は、80年代の洋楽をコンセプトとしたユーロビートやエレポップに影響を受けた、キラキラ輝く独特のサウンドに、甘い恋の歌詞。CDジャケットやブ

